

早稲田大学出身女性教員の職能形成に関する一考察

—日本及び中国の女性教員のライフストーリー分析を通じて—

小林(新保) 敦子・川原健太郎・松山 鮎子・山本 桃子
蒋 偉・李 雪・孫 佳茹

キーワード：早稲田大学、女性教員、職能形成、開放制教員養成制度、サークル、中国人、ライフストーリー、留学生

【要旨】本研究の目的は、早稲田大学出身の女性教員（1940年代から80年代生まれ）のライフストーリーに基づきながら、早稲田大学が1960年代からの約半世紀の間に、女性教員の職能形成において、どのような役割を果たしてきたのかを、明らかにすることである。早稲田大学は、開放制の教員免許制度をとっているが、本稿においては、戦後日本における開放制教員免許制度の下で、女性教員としての職能形成に早稲田大学が果たした役割も合わせて検討していく。

女性教員の語りからは、早稲田大学での学びとして、自由な雰囲気というメリットを指摘しながらも、技術面での不足を指摘する意見が少なくなかった。ただし、資質の高さから、自分で動き、チャンスを得て自己成長を遂げている。経験値が高く、広い知識、人間力を持ち、教員としての「のびしろ」があるというのが、早稲田大学の女性教員に共通していると言える。

また、大学での学びとして、サークルなども含む幅広い人間関係で得た経験が大きな比重を占めている。こうした繋がりや卒業後の現在まで続いていて、卒業生のネットワークが彼女たちの生活全体を豊かにしており、仕事を含む自身の人生全体を前向きに捉えることにも結びついていると考えられる。前向きさから来る生徒に向かう情熱も、早稲田出身の女性教員の持つエートスとして、指摘できる。

一方、本研究では、早稲田大学で学んだ中国人女子留学生についての帰国後の追跡調査も行い、早稲田大学で学んだことをどのように生かし、早稲田大学での学びがその後のキャリア形成にどのように影響を与えているのか検証した。

大学で学んだ先進的な理念を中国の教育現場で生かせない場合はあるものの、彼女たちは現場の状況に合わせてながら、臨機応変に教育実践を行っている。また、早稲田大学での学位取得は、彼女たちのその後のキャリア形成にも影響を与えていること、そして、早稲田大学で学んだことを誇りとして感じていることが、調査の結果、明らかにされた。

はじめに

本研究の目的は、早稲田大学出身の女性教員（1940年代から80年代生まれ）のライフストーリーに基づきながら、早稲田大学が1960年代からの約半世紀の間に、女性教員の職能形成において、どのような役割を果たしてきたのかを、明らかにすることである。

日本では、教育職員免許法（1949年5月）により教員免許は開放制をとることになった。しかし、近年は教職大学院の開設、教員免許更新制の導入などもあり、教員養成のあり方が模索され

ている¹。

早稲田大学は戦後の私立大学の中でも最も歴史が古い開放制の教育学部を持ち、教員となる卒業生も少なくない。本稿では、開放制の教育学部に学んだ女性教員のケーススタディを実証的に分析し、改めて開放制教員養成制度下で、女性教員の職能形成に早稲田大学が果たしてきた役割を合わせて検証したい。

また、早稲田大学は、戦前、戦後を通じて中国、韓国など、アジアの留学生を積極的に受け入れ、早稲田出身の卒業生が帰国後、教育界に入ることで、それぞれの国での早稲田大学の名望を高めてきた歴史的経緯がある。そのため、本稿では、早稲田大学卒業の中国人女子留学生が、早稲田大学で学んだことをどのように生かしているのか、早稲田大学での学びがその後のキャリア形成にどのように役にたっているのか追跡調査を行っていきたい。

早稲田大学教育学部においては女子学生の比率が高まり（1985年時の教育学部在生学生における女子学生の割合は約19.6%²であったのに対し、2015年時の同割合は約37.9%³と、女子学生の数は30年間でほぼ倍増している）、それに伴い早稲田出身の女性教員が増えている。早稲田大学出身の女性教員は、ロールモデルとしての役割を果たしてきたことが指摘されながらも、これまで早稲田出身の女性教員に関する実証的な研究に関して、管見の限りでは蓄積が不十分な状況にある。また早稲田大学は現在においても、多くの中国からの女子留学生を受け入れており、彼女たちは卒業後に、現地の教育機関で活躍しているが、その実態は、ほとんど明らかにされてこなかった。本研究は、日本人だけでなく、中国人の留学生についても検討している点に特徴が認められよう。

本研究は、早稲田大学教育総合研究所の公募研究「早稲田大学出身女性教員の戦後史—ライフストーリーの分析を通じて」（2014年度から2015年度）のまとめである。教師のライフストーリーの語りから教師の職能形成について明らかにしようとした先行研究としては、稲垣忠彦、藤原顕、あるいは山崎準二の研究がある⁴。本研究においては、こうした先行研究に学びつつ、質的調査の手法を用い、インタビューによって女性教員のライフストーリーを聞きとり、主にKJ法によってデータを分析した（付表参照）。

日本側女性教員インタビューについては、川原がコーディネーターとなり稲門教育会に協力を求めインタビューを実施してきたものが多い。インタビュー対象者は、①1940年代生まれ（退職者）、②1950年代～1960年代生まれ（中堅、管理職を含む）、③1970年代～1980年代生まれ（中堅、若手）、以上の年齢層の女性教員（教員経験者）である。中国側女性教員は、1970年代～1980年代生まれが中心である。

その他、各メンバーが個別にインタビューを行い、早稲田大学出身の女性教員であるインタビュー対象者の総計は、日本人14人中国人8人となっている。本プロジェクトの参加者には、中国人留学生がメンバーとして加わっており、そのため、こうした中国人留学経験者へのインタビューが可能となった。そのうち、本稿においては、論文の趣旨に沿って、日本人5人、中国人5人を取り上げ、考察している。

論文の構成としては、第1章から第3章が日本人女性教員（第1章：1940年代生まれ、第2章：1950年代～1960年代生まれ、第3章：1980年代生まれ）、第4章から第6章が中国人女性教員で

ある。中国人女性教員については、いずれも早稲田大学の大学院（研究生、修士学位取得、博士学位取得）で学んだ経験を持つ若手研究者である。

本研究を通じて、戦後、早稲田大学が輩出した女性教員が日本の教育界、あるいはアジアの教育界に果たしてきた役割を実証的に検証するとともに、今後、早稲田大学がどのような教員を養成すべきなのか、といった教員像を考察していきたい。（小林(新保) 敦子）

調査対象者

名 前	出 生	校種(科目)／専攻	早大卒業年又は在籍時期	調査日
A氏	1940年代	高等学校(国語科)	1963年卒	2015年1月19日
B氏	1940年代	小学校	1969年卒	2014年11月10日
C氏	1950年代	高等学校(国語科)	1976年卒	2014年10月29日
D氏	1960年代	高等学校(社会科)	1990年卒	2014年11月25日
E氏	1980年代	高等学校(公 民)	2010年卒	2015年7月29日
a氏	1970年代	日本語	2011年5月-2012年5月	2014年11月30日
b氏	1980年代	日本語	2012年9月-2014年5月	2015年1月10日
c氏	1980年代	日本語	2010年9月-2012年9月	2014年11月29日
d氏	1980年代	日本語	2009年4月-2011年9月 (2009年9月-2010年3月休学)	2014年12月4日
e氏	1970年代	歴史学	2003年4月-2012年3月	2014年12月27日

第1章 開放制教員制度下の私立大学における女性教員のキャリア形成に関する学び

本章では、1940年代生まれの2人の早稲田大学卒業生の女性教員を対象にして実施したライフストーリーインタビューを中心に論じる。A氏（1940年生、1963年学部卒）は大学卒業後に専攻科で学び、B氏（1946年生、1969年学部卒）は早稲田大学卒業後に小学校教育の資格を取得しており、早稲田大学の学部教育は、教員としての職能形成の基礎としての役割を果たしている。

1. 専攻科による再教育の場としての大学

第1のケース、A氏は1940年北京市で出生、5歳半で山口県に引揚、早稲田大学第一文学部国文学専修を1963年に卒業し、科目は国語科である。1960年代中頃より2000年代初頭にかけて高等学校教諭、教頭、校長を歴任している。

A氏は、入学前には教員の道をすでに志望していた点に特徴がみえる。教員志望は、大学受験時から考えており「教員試験を受けて山口県か東京都かどちらかで教員になろうという気持ちを持っていた」とのことであった。すなわち、A氏は在学時から教員を志していた。

A氏の卒業論文のテーマは江戸初期の仮名草子である富山道治『竹斎』、藪医者・竹斎に関して書かれた作品であった。教育実習は東京の私立で行った。東京で実習をしたのは、A氏は山口に戻るつもりがなかったためだそうで、A氏によれば大学の何らかのあっせんがあったようである。実習に関しては「あまりに(人数が)多過ぎて、授業も実習も数が少なかったような気がする

るので、母校に帰ってやれば良かったかもしれないと思った」と述べている。この証言には、地元に戻らず母校以外の実習を行う場合の実習の質の維持といった課題や、実習を受ける実習生の多さや教壇実習の機会の少なさといった問題が含まれている。

A氏は大学4年夏に東京都の教員採用試験に合格し名簿登載されるが、採用には至らなかったという。そのため、新卒で都内の私立高校に教諭の立場で就職をすることとなる(1963年)。そこでは新任の年に1年間、教員として勤務をし、翌1964年には勤務のかたわら早稲田大学教育学部の国語国文学専攻科に入学し、再び早稲田大学専攻科にて1年間学ぶ。

当時は高等学校教諭2級免許であり、専攻科終了後に1級免許になるとのことで、当時の勤務先の私立高校校長に申し出をし、早稲田大学に通っていたが、仕事との両立は相当に厳しいものであったようだ。「(専攻科では)女子大を出てすぐという方も、仕事を持っていない方も、卒業して10年ぐらいたって、そろそろ管理職試験というような年配の男性」もいたとA氏は当時の状況を語る。教諭・社会人の立場となつてからさまざまな背景の人々が集い、意欲の高い人々たちのつながりの中で学ぶことの意義は、A氏にとり大きいものであったと推察できる。

この時期についてA氏はこのように語る。「国語国文学専攻科の1年間は充実していた。文学部の学生のとより数倍勉強した。教師として授業を始めて、初めて、ここが足りない、全然勉強してないというのがたくさん出てくるので、必死だった。勉強するって面白いなってこのとき初めて思った」。こうした叙述からも、その熱心さは伝わってくる。結果、専攻科在学時にも再度東京都の教員採用試験を受験し、名簿掲載されることになった。

早稲田大学専攻科における経験の意義は、A氏自身の言葉に如実に現れている。「早稲田大時代で、いまでも貴重な体験として忘れられないのは、学部卒業後、教諭の仕事の続けながら入学した教育学部の『国語国文学専攻科』。話しながら、あの体験が教諭としての自分にどれだけ貢献したかを思い出した。専攻科は教育学部の大学院として発展的解消したが、現在でも、仕事に悩みながら、再教育を受けたいと思う人々が多いのではないか」。教諭としての人生を歩むにあたって専攻科での教育は意義のあることと振り返り、専攻科は卒業後の教員の再教育の場として重要な役割を果たしていたことがみえた。

2. 小学校教諭にとっての基盤力形成の場

次に取り上げるのは現在60代の元公立小学校教諭、B氏のケースである。B氏は1946年東京生まれ、都立高等学校出身で地元は東京であり、1960年代後半より2000年代にかけて公立小学校教諭、教頭、校長を歴任した人物である。早稲田大学教育学部社会科地理歴史専修を1969年に卒業した。2014年度現在、早稲田大学では小学校教諭免許の取得が可能になっているが、B氏の在籍時も含め早稲田大学では長らく小学校教諭免許を取ることができなかつたため、特に60代の早大卒小学校教諭は極めて珍しい。

B氏が早大を志望した契機は高校2年頃、大学祭に誘われ早稲田大学のキャンパスに入ったことが端緒であった。B氏は当時受けた印象を次のように述べる。「早稲田って、いいなあ、という憧れの気持ちを持った(中略)早稲田がいいのは自由な雰囲気。昔はもっと自由さがあった」。

教員への就職志望には4年制大学を選択したことの影響があったようで、「4年制の大学を出

たから、(中略)やはり就職したい、仕事をしたいということで、この道を選んできた」と語る。こうしたこともあり、早稲田大学で当時実施されていた入学試験の面接においては、教員を志していることを伝えていた。

B氏の早稲田大学入学は1965年(～1969年3月卒業)のため、在学中はまさに学生運動が盛んで、当時の大学は静かに学問を行える状況にはなかったようである。その頃の学びに関して、B氏は「落ち着かないといえば、落ち着かない。あまりしっかり勉強してないで4年間過ごしたって言える。ただ、物事をよく考える時期ではあった」と、激動の社会状況の中で自らの思索を深める時期であったととらえている。なお、大学での学びに関しては、卒業論文を挙げる。B氏は卒論にドイツ史をテーマとし「卒論を書くのがとても楽しかった」と振り返っている。

B氏は一般企業の受験もしていたというが、当時は男女雇用機会均等法以前の状況もあり大変厳しかったようだ。これは1960年代後半の女子学生の就職における状況を示しているものであり、当時の女子学生が教員を目指すモチベーションの1つとなっていたと推察される。

B氏自身「本命の教員採用試験を受けるしかない」との決意で教員就職に臨んでいた。しかしながら、社会科の採用倍率等の厳しさから、関東近辺の公立中高の試験には合格しなかったとのことであった。そこで、卒業直前の2月に小学校の助教諭試験を受けたという。B氏は試験に合格し、助教諭として公立小学校に赴任することになる。当時を「とにかく最後の手段で、2月に受けた。結構、倍率があったが、幸いに受かった。小学校の臨時免許(3級)をいただき、(中略)赴任した」と語る。

当時早稲田大学では小学校教員免許は取得できないこともあり、赴任1年目に1年生の担任をしながら他大学の通信教育課程で二種の免許状を取得した。当初、「どうやって小学校の子どもたちを教えるんだろうと本当に不安だった。ましてや1年生の担任だから、8科目全部を教えなさいといけな」と苦慮していたことを述べていた。そうした状況乗り越え、その後教員での実践と研究を進めることとなる。

B氏のケースは卒業後、学部在学時取得できない種類の免許状と採用を自助努力により成し遂げたケースである。その一方、大学学部教育は学びの基礎を作る役割を担ったと思われる。なお、2015年現在早稲田大学教育学部では初等教育学専攻が設置され、小学校免許取得が可能となっている。大学での小学校免許取得の制度ができあがる前から取得をしていた卒業生の存在は、その後の教員のネットワークづくりに寄与するものと推察できる。

本章において分析した2人の女性教員の事例からは、A氏のように大学の専攻科が卒業後のより専門的な学びの場となっていたことや、B氏のように後の学びのための基礎力醸成の場を担っていたことがわかる。また、それぞれの場には様々な人的ネットワークが介在していることも伺えた。

本章で取り上げた2ケースの卒業生はいずれも自らの意志でネットワークを広げるなど、大学という場を自らの努力で活用していたことは共通項と思われる。このように、在学者の自主性や自助努力に委ねられている側面は少なくないと推察される。大学に潜在している学びの可能性やそれに付随するネットワークを活用するサポートをいかにしていくかが今後の課題であろう。

(川原 健太郎)

第2章 教師の職業観と大学における学びとの関係について

本章においては、教師の職業観及び大学における学びとの関係について、検証する。本調査で特に筆者が関心をもったのは、語り手たちが自身のキャリアに誇りをもち、生きがいをもって仕事をしていることである。こうした肯定的な意識は、どこからくるのだろうか。この点に注目し、具体的な課題として、彼女たちが教師の仕事をどう捉えているのか、また、それは大学での学びとどのように結びつくのかを明らかにする。

1. インタビュー対象者及び分析の手続き

本章は、対象者C氏（1950年代生まれ）、D氏（1960年代生まれ）を分析の対象とした。まず、C氏は東京出身で、1976年に早稲田大学の教育学部国語国文学科を卒業した女性教師である。在学中、混声合唱のサークルに所属していた彼女は、当初、就職先に声を使う職業のアナウンサーを志望していた。叔父が教員だったため、母親には教師になるよう勧められていたというが、彼女は「人前が出るのが苦手」だったため、初めは「教員には絶対ならない」と考えていたそうである。だが、実習をきっかけに「教員もありかも」と思い直し、最終的にその道を選んだ。

在学中に神奈川県で採用が決定し、初任地の中学校で4年間勤めると、その後は退職まで、県内の5、6校の高校で勤務した。中でも工業高校での勤務時は、学校始まって以来の専任女性教員だったため、職場環境の面で苦労が多かったという。家族は、現役時代にサラリーマンの夫との間に2児をもうけた。現在は退職後の再任用制度を利用して、1年ごとに各学校を異動しながら、週に3日間働いている。

次に、2人目のD氏は京都府出身である。彼女は1990年に早稲田大学教育学部の地理歴史専修を卒業してから、他大学の大学院の教育学研究科へ進学した。そして、2年間、院で学んだ後に東京都の教員採用試験に合格した。在学中は、もともと西洋史に関心があったため、ドイツ史のゼミで学び、サークルは地理学研究と雑誌編集の2つに所属していた。

彼女は親兄弟・親戚に教員がおらず、入学時は教師になりたいと思っていなかったそうである。最初に教職の道を目指したのは、就職活動の時期だった。その時には、女性で仕事を続けるなら教員か公務員と考えていたという。採用試験合格後、最初の赴任先は区内にある工業高校だった。それから3年後に普通科高校へ転任となり、ここで10年間勤めあげた。その間、同じく都立の定時制高校で教員をしている夫と結婚し、2児をもうけ、現在も現役教師として働いている。

本章では、KJ法によりインタビューデータの分析をおこなった。まず、2名のインタビューの逐語録から、それぞれの語りの特徴的な語句を取り出し、カードに記入していった。次に、書き出した全てのカードのカテゴリー分けを模造紙上で行った。最初に酷似した内容のカードを重ねていき、近い内容のものは近づけて配置していった。さらに、ある程度まとまりができた段階で、各カテゴリーにそれを代表する見出しをつけていった。この作業を繰り返し、カテゴリーが6、7個になったところで作業を終了し、各カテゴリーどうしの関連を検討していった。以下に、カード内容を大カテゴリーと小カテゴリーに分類した結果を一覧にして示す（付表参照）。

次節では、分析で導き出した語りの論理を、具体的な5つの項目から述べる。

2. 早稲田大学卒業の女性高校教師の語り

(1) 「生徒への想い」を中心とした語り

まず、教師としての経験を語る際、「授業」、「職場環境」、自分自身の「職業観」など全てにわたり、それが生徒への想いに集約される点に特徴が見出せた。たとえば、C氏は教員生活で苦勞したことを以下のように述べた。

「本当に人間相手だから、同じ対応をしても、取り方が当然違う。そういう苦勞はいっぱいあった（中略）。分かってないことは教えられない。自分の力のなさっていうのは本当に思った。信頼されない。教科も影響する」。

上記のように、彼女は教師としての苦勞を、多様な生徒たちに合わせて対応していかなければならないことと、生徒との信頼関係を築くための授業づくりをおこなうことだと話した。また、教師という仕事のやりがいは「生徒が慕ってくれること」で、人間相手であるゆえ一言が人生を変えることもあり、失敗すると大変だがそこに面白さがあると語った。このように、教師は教員生活における苦勞、やりがいを、何より生徒への想いに結びつけ経験するものと考えられる。

(2) 授業の「面白さ」を伝えること：専門へのこだわり

次に特徴的なのは、彼女たちがそれぞれの専門科目に誇りをもっており、生徒との関わりの中でそれを深めていくことに日々努力しているという点である。高校教師は、授業により生徒の信頼を得ることもあれば、失うこともある。そのため、何年経っても「教材研究に追われる毎日」は変わらないという。

また、C氏、D氏ともにその教科の「面白さ」を授業のなかで生徒に伝えたいという点が、専門科目にこだわりをもち、研究を深めていく動機となっていた。たとえば、D氏は定時制で働くことにこだわりを持つ夫と自分自身を比べながら、それについて以下のように語る。

「教員の道はいろいろある。夫は定時制なので全然違うところで勝負している。私は授業が好きだし、世界史を勉強したい。それを聞いてくれる生徒がいる所のほうが、やるんだったらいいなと思った」。

このように、専門へのこだわりの根底には、何より教師自身がその科目を好きで、自分が魅力を感じるその「面白さ」を、授業を通して生徒に伝えたいという熱意があった。なお、この「面白さ」は、彼女たち自身が過去に大学で受けた授業の中で、実感した経験に裏付けられていた。たとえば、C氏にとってそれは学部時代の『平家物語』の授業であり、一方、D氏の場合は、1989年、ベルリンの壁が崩壊した翌日のドイツ史の授業であった。こうして大学の専門科目でその教科の「面白さ」を実感したこと、それが教師の授業への姿勢に結びついていた。

(3) キャリアへの自負

次に、いずれも教職に誇りを持ち、自分の一生の仕事と捉える点に特徴が見出せた。たとえば、D氏は大学時代の友人との集まりで、フルタイム就労している女性が自分以外にほとんどいなかったことを知った時、「石にかじりついてでも仕事だけはやろう」と感じたという。教職は、「好きでなければやってられない」というほど、女性にとって厳しい面もあるが、生徒と関わり専門を深めることに楽しさを感じながら、一生続けられる仕事である。このように、生涯にわたりキャリアを充実させていける仕事という点に、教職に対する両者の自負の感情が読み取れた。

(4) 子育てにおける苦勞と家族への感謝

C氏、D氏とも30代から40代にかけて経験した子育てが、教師生活の苦勞となり仕事を続けていくことへの葛藤を生んでいた。以下は、D氏が子育て中、たまたま生徒の進路相談を受けたエピソードである。

「普段なかなか話してくれない子が話し始めてくれたから、いいチャンスだと思って、廊下でずっとしゃべってた。実は送り迎えの時間が迫って気が気じゃなかったけど、これを逃したらこの子もう話してくれないかなみたいになって、ぎりぎりまでしゃべって…」。

さらに、こうした話題は、家族への感謝を中心に語られる点に特徴があった。D氏は次のように語る。

「京都から、母が来る。それもないとやっぱり無理かなっていう気がした」。

また、C氏はこのように言う。

「夫は全然違う職業で、おまけに単身赴任。両親が居なかったら、とっくに辞めていた」。

なお、いずれも大変だった点として挙げたのが、朝の通勤時間、夕方の会議や放課後の生徒指導などとの兼ね合いで、どうしても時間ぎりぎりになってしまうという保育園の朝夕の送り迎えであった。また、子どもの病気で日中自宅に帰らなくてはならない、部活や行事などで休日ですら子どもと過ごせない、こうした具体的な話題からも、子育て世代の教師の慌ただしさや苦勞が感じられた。ここから、自分の子どもと過ごす時間を大切にしたいと願いながらも、やはり生徒との関係を疎かにできないという、子育てをする女性教師に特有の悩みが読み取れる。そうした苦勞のなかで、両親の支えは、彼女たちが仕事を続ける大きな力となったといえる。

(5) 大学での「学び」について

最後に、早稲田大学での「学び」について述べていく。他の職業に比べると、大学で学んだ専門を直接生かせる仕事であるという点が、教職の特徴の1つである。その意味で、大学で学んだことは現在の専門の「土台」となっているというのがC氏、D氏の共通認識であった。その反面、両者とも、具体的に大学の講義で学んだことはあまり役に立っていない、特に技術的な知識の習得機会が少なかったと一定の不満を述べていた。その理由としては、教育学部の基礎科目の印象が薄い、レジュメの書き方や発表の仕方など、基本的な技術を学んだ経験の不足といった点が挙げられていた。

では、どのような点を「土台」だと感じるのだろうか。たとえば、それについてC氏は以下のように語っている。

「土台にはなっていると思う。いろんな教材をやって、忘れてはいるけれども、とにかくほぼ4年間、いろんな国語的なものやって（中略）肥やしになる」。

このように、C氏は大学で学んだ専門科目にまつわるさまざまな事柄が、国語を教える上での幅広い知識の基礎となっていると認識している。それが「土台」の意味の1つであった。

また、両者ともに4年間の大学生活を「とても楽しかった」と肯定的に捉えており、特に、サークル活動の繋がりが学生生活の充実に結びついたと語っている。中でも、D氏は早稲田大学には「自由な空気」があり、さまざまな人間がいる分、「自分からいかないと埋没」してしまう。その中で、サークル活動が自分にとって専門の外に視野を広げてくれる貴重な機会だったという。つ

まり、ここでいう「学び」の内容で大きな比重を占めているのは、サークルなども含む幅広い人間関係で得た経験なのだと考えられる。

さらに、両者ともその繋がりは卒業後の現在まで続いていて、その仲間付き合いが生活上の楽しみのひとつとなっている。早稲田大学には、現在まで10年以上存続している歴史の長いサークルが数多くある。また、サークルだけでなく、各地の稲門会の集まりやホームカミングデーなど、卒業生が大学と関わる機会も多い。この強い組織力が、卒業生を大学の活動に関わらせるきっかけとなり、そこで昔話を皆で語り合ったり活動したりすることが、在学中の思い出を肯定的に捉え返すこと、現在の仲間同士の結びつきを強化することに繋がっていた。そして、こうした現在の卒業生のネットワークが彼女たちの生活全体を豊かにしており、それが結果的に、仕事を含む自身の人生全体を前向きに捉えることにも結びついていると考えられる。以上が、大学における土台としての「学び」と職業との関わりの意味するところである。(松山 鮎子)

第3章 女性教師E氏にとっての早稲田大学

本章は、早稲田大学教育学研究科出身の女性教師E氏（1980年代生まれ）の語りから、E氏が教師生活のなかでどのように大学時代の経験を活かしているかを明らかにする。早稲田大学教育学部で4年、さらに教育学研究科修士課程で2年、合計6年を早稲田大学で過ごしたE氏にとって、大学はどのような場所であったのか、それが現在の教師生活にどのように結びついているのか、これら2点を考察することを本章の目的とする。

1. インタビュー対象者

本稿は、今回の調査対象者のなかで最も卒業年が新しいE氏を分析の対象とした。インタビューの中でも大学卒業年が新しいE氏の事例を個別で扱い、大学時代を中心に分析する。現在のE氏は、愛知県出身で2010年に早稲田大学教育学研究科修士課程を卒業した女性教師である。教育学部時代にはテニスサークルに所属し、大学院生時代には教育ボランティアとしてカンボジアを度々訪れるなど、活発な大学生活を送っていた。

彼女は自身が小学生のころから教職を志し、大学受験の際、学内の商学部や社会科学部にも合格しながら、幼いころから志望していた教員になるべく、教育学部へ入学した。愛知県内にある教員養成系の大学に進学せず、あえて早稲田大学という東京の大学を目指した理由について、E氏は「大学はそと（県外）に出なかった」と語った。

修士2年次に東京都と愛知県の教員採用試験を受け、ともに合格。教員採用試験の中でも、特に倍率の高い高校公民科という難関を突破した。愛知県の教員を選び、地元へ帰って公立高校の教員を5年務め、2015年3月から産休のため現場を離れている。

2. 大学での経験から培われた職能

本節では、E氏の語りの中からとくに大学生活と教師生活に関わる部分を抜粋し、大学受験、早稲田大学在学時代、教員時代と時系列に沿って分析する。E氏が大学を選ぶ際に早稲田大学に対してどのような思いを持っていたのか、入学後の大学生活ではどのようなことを学んだのか、

それが今の教育現場でどのように活用されているのか。これらをインタビュー内容から明らかにすることで、E氏が自身の大学生生活と教師生活を、どのように結び付けているのかに迫る。

(1) 早稲田大学に絞った大学受験

生まれてから高校卒業までをずっと愛知県で過ごしたE氏は、どのようなきっかけで早稲田大学を志望したのだろうか。そのきっかけについて聞くと、東京の大学の中でもとくに早稲田を早い時期から意識していたことがわかった。「早稲田を選んだ理由は、最初はスポーツがやりたいと思っていて、スポーツ科学部があったから、惹かれたのが始まりだった。だんだん早稲田自体に惹かれていった。大学を選ぶ時点で、早稲田を選んだ理由は、親と一緒に1回東京の大学を見に行き、学習院とか明治とか、東京都立大学とかいろいろ見に行った中で、やっぱり早稲田が一番、印象に残った。もともと意識していたこともあるけれど、「早稲田がいいな」と思った。」

「早稲田自体に惹かれていった」とE氏が語っているように、愛知県外に出たい、という思いと同時に、早稲田に行きたい、という具体的な目標を持っていた。その目標を1年間の浪人時代を経て実現し、念願の教育学部へ入学した。

では、当時のE氏にとって早稲田大学の魅力とは何だったのだろうか。それを知る手がかりが、次の発言の中にある。「愛知って結構狭くて、割と地元意識が強く、地元にとどまりたい人が多い。けれども、私はやっぱり「もっと広い世界が見たい」という中で、「早稲田大学」はカッコよかった。自分が早稲田大学と言ったら超カッコいいな、という、そういう軽い憧れみたいな気持ちで、とにかく早稲田に入りたかった」。

このように、浪人時代のE氏にとって、早稲田大学は「広い世界」の象徴であった。大学の規模や留学生の多さなど、未知の人々との出会う機会に恵まれている点が、E氏にとって魅力的に映ったと考えられる。「とにかく早稲田に入りたい」という言葉から伺えるように、大学入学以前から、E氏は早稲田大学に対して強い思い入れがあった。

(2) 在学中の多様な人々との出会い

では、大学入学後の生活は、思い描いていたような「広い世界」との出会いに結びついたのだろうか。学部時代に印象に残っている授業について、E氏は学部ゼミのゲストとしてカラーコーディネーターの講師を招いた回を挙げた。その授業が、教員になった今でも、自分の資格取得を目指すモチベーションになっていると語った。「ゼミで先生の(知り合いの)カラーコーディネーター方をゲストにお招きした。とても良かった。もともとカラーが好きだったので、触発された。産休育休の間に、カラーコーディネートの資格取り、(中略)いつか自分の生徒に、総合学習でやりたいなって思う。自分に似合う色とか見つけると明るくなる。」

このようにE氏は、自身の興味を触発されたカラーコーディネーターとの出会い、さらにそれを資格として活かしたいと考えていた。上記の発言からは、E氏が学部生時代のうちから、授業や学内での出会いの機会を一時的に享受するのではなく、機会を活かして次のステップにつなげていく積極的な態度を身に着けていたことがわかる。

在学中のE氏は、ただ闇雲に学内での出会いの機会を求めるのではなく、自分の興味ややりたいことを明確に理解した上で、さまざまな出会いを活用していった。それは、大学院時代の海外ボランティアや日本語教育チューターなどの授業外活動からも明らかである。「日本語教育も

興味があって、日本語教育の授業を取っていた。カンボジアでボランティアをして、4回くらい行った。そこで、日本語を教え、子どもたちと遊んだ。「ソロモン諸島の人とか、絶対普通じゃ知り合えないような人、インド人とか、ネパールとかフランスとか、本当に世界のいろんなところから来ている学生と友達になって、日本語を教えたり、いろいろ教えてもらったりという交流ができた」。

海外でのボランティア活動への参加や日本語教育に関わる授業の履修など、E氏は自身の興味のある分野のフィールドと関わるよう精力的に動いていた。

ここまでの分析を通して、(1)でE氏が話した「広い世界」とは、それまでに経験したことのない出会いを指すと同時に、教員という最終的な目標と、ボランティア活動や日本語教育などその周辺の活動に関わる幅広い種類のアクティビティや異分野の人との交流を指していることが明らかになった。

これは、大学入学時、既に「教員になる」という確固たる目標を持っていたE氏だからこそ、早稲田大学ならではの多様な出会いを自身のキャリアに活かすことができたのだと考えられる。E氏にとっての大学の魅力とは、「普通じゃ知り合えないような人」と「交流できた」、すなわち多様な国籍やバックグラウンドの学生と知り合うことができた、という点に集約できる。

(3) 他大学との相対化によって不満が顕在化

では逆に、E氏が早稲田大学に対して不満を抱くことはなかったのだろうか。不満があったとしたら、どのような場面で感じていたのだろうか。E氏は、在学時の不満について次のように語った。

「大教室 (の授業) が多いから、大学の学部が終わったときに『自分、全然勉強できてない』って思った。やっぱり、社会人になって、就職してからいろんな人の話を聞くと、(中略) マンツーマンで卒論みてもらったとか、そういうのがポピュラーなんだけど、『大学で何勉強したの?』って言われると、『なんかよく覚えていない』って感じになってしまう」。

早稲田大学に対する不満を、E氏は「大教室の授業が多い」と指摘し、そのために自身が学部卒業時に「全然勉強できてない」感じた、と語った。また、早稲田大学で不満だった点について、次のように総括した。「他の大学に比べると、実践がない。(中略) 授業の規模の問題。いろんな人に出会えるっていうマンモス校ならではのメリットもあるけど、勉強の環境面では劣る」。

早稲田大学で良かった点は「いろんな人に出会える」こと、そして不満だった点は「学習環境が他大学よりも劣る」点だと話した。

ただし、この大学への不満点も、視点を変えるとポジティブに捉えられる。なぜなら、大規模授業が多く、教員からの指導が十分に受けられないからこそ、学生は自力で外部とのネットワークを構築するからである。大学院生時代、当時関心のあった開発教育の勉強のために学外のゼミに参加していた経験について、E氏は次のように語った。「開発教育がやりたかったで、田中先生っていう立教大学の先生のところ週1回行き、ゼミに参加させてもらった。早稲田 (の授業が) 終わったら、自転車池袋の立教まで行った。(田中先生が) 良くしてくれて、楽しかった」。

このように、教員に対する学生の人数や学習環境において不満を抱えていたE氏は、他大学へのゼミ参加など、不満をバネに自ら積極的に動いていた。E氏のように、大学入学時から自分のやりたいことに対して強い意志を持ってと取り組む学生にとっては、ともすると放任主義とも取

られる早稲田大学の学習環境がプラスに働いていたとも言える。すなわち、自ら主体的に考えて行動する実践力を培っていたとも言える。では、この実践力は、E氏が勤務する学校現場においてどのように活かされているのだろうか。

(4) 教員になってから活かされる大学時代の経験

高校教師となったE氏は、大学時代に学んだ内容を学校現場で実践している。具体的には、特別活動の内容へのアサーティブ・コミュニケーションの導入などを挙げた。「例えば高校1年生で、1泊2日で宿泊研修がある。(中略)アサーティブ・コミュニケーション、ウィン・ウインの関係、相手のことも尊重しながら言うみたいなことを、(中略)ぜひやってみようという話になった。私そういうの、大学院のときに好きだったから、やってと言われて、自分で企画した」。

授業面、つまり指導案の作成や授業実践のスキルについては他大出身の教師に及ばないことが多いと語ったE氏だったが、上述の「アサーティブ・コミュニケーションを取り入れた宿泊研修での企画」など、大学で身につけた知識を実践に移した経験に関しては複数の事例を語った。(2)で語ったカラーコーディネーターの総合学習への利用などもその例の1つである。

このように、E氏にとっての大学生活は、数多くの人々との出会いの場であったと同時に、知識や人脈を生かして自らの目標のために行動する実践力を培った期間であった。そしてその実践力が、現在の学校現場でも活かされており、生徒や職場の教師を巻き込む力にもつながっている。以上が、「大学はどのような場所であったのか、それが現在の教師生活にどのように結びついているのか」を考察する、本章の目的に対する結論である。(山本 桃子)

第4章 中国人女性教員のライフストーリーから見る留学経験の影響—日本語教育実践の変容—

本章は、早稲田大学に留学した2人の中国人女性教員を対象に、彼女たちのライフストーリーを通して、留学で何を得たのか、またその後の日本語教育実践にどのような影響があるのかについて明らかにするものである。

1983年、日本政府は「留学生10万人計画」を発表した。そして、留学生人数の拡大を目的として2008年にさらに「留学生30万人計画」を発表した。

独立行政法人日本学生支援機構によると、2013年5月1日現在の留学生総数が135,519人のうち、中国人留学生数が最も多く、81,884人で60.4%を占めている⁵。また、私立教育機関(主に大学)における留学生数は96,543人で、留学生総数の71.2%を占める。

私立教育機関の中で、早稲田大学は留学生の受け入れ機関として、その規模が大きい。早稲田大学留学センターによると、2015年在学留学生総数が4,921人のうち、中国人留学生数が最も多く、2,468人で50.2%を占めている⁶。このように早稲田大学には中国人留学生数が多く、留学生は帰国後、様々な分野で活躍し、その中で、教員として働いている者も多数いる。

早稲田大学の日本語教育研究科(以下、日研と略称)は2001年に設立され、日本語教育および日本語教員の養成について理論的に学ぶ場である⁷。日研は特色のある入試制度を設けている。授業実施期間を Semester 制による2学期制とし、それぞれの学期に合わせた年に2回の入試(4月・9月)を実施している。在籍者の専門はさまざまで、留学生が在学者の約3割を占めている。

本章で取り上げる2人の教員はともに日研の非正規生である。

1. インタビュー対象者 a 氏—ゼミでの学び

a 氏は、1974年生まれの湖南省出身の女性である（既婚で15歳の息子がいる）。1992年に湖南省の某大学の日本語学科に入学し、1996年に卒業した。卒業後は、同大学の日本語教員として1996年6月から仕事を始めた。そして、勤務大学に許可してもらい、2006年に北京に某大学院で日本語教育について学び、2009年に修士学位の取得後、9月に同大学院の博士後期課程に入学した。

同大学院は日本国際交流基金と提携関係を持っており、毎年、博士後期課程の在籍者の中から優秀な学生を選抜して、1年間の日本研修の機会を提供する。学費と寮費は全部基金によって支給され、また月に10万円以上の生活費がある。受け入れ先の日本側の大学に関しては、基本的に自分の研究課題と関係のある教員を探すことになる。

a 氏の場合、「大学（の知名度等）よりも教授（指導能力・研究分野等）を重視し、博士論文の研究分野の専門家を」選び、2011年5月から2012年5月にかけて、早稲田大学の日本語教育研究科で学んだ。

a 氏は自分の研究テーマに近い指導教官である教授のゼミに所属した。

当時のゼミについて、「ゼミ生は本当に研究能力が高い。自分なりの考え方を持っていて、積極的に自分の意見を述べる。（中略）先生は逆にあまり発言しない。先生が発言したがるのではなくて、チャンスがない。先生も参加者の1人で、最後にまとめとして意見を述べる」と a 氏は言った。

中国の大学院にもゼミがあるが、教員は絶対的な主導権を握っており、ゼミ生を指導するという形が圧倒的に多い。そのため、a 氏は日本式のゼミに参加し、ショックを受け、「非常に印象深い」と語る。

a 氏は、「日本の先生がどのように授業を進めるのか理解して、帰国したら自分の授業で活用したい」と考え、同教授の「文化概論」という授業にも参加した。その授業で、同教授が「国家の文化よりも、『個』の文化を強調」したが、a 氏にとって新たな視点で、大いに啓発されたという。なぜなら、a 氏が今まで受けた教育の中で、「中国は〇〇だ」、「日本人は〇〇だ」というステレオタイプの考え方がほとんどで、「個性があまり重要視されていなかった」ためである。a 氏はコミュニケーションをとる際に、「国や民族の文化よりも、個人一人ひとりの文化を重視すれば、相手に対する理解が深まるだけでなく、コミュニケーションももっとうまくいく」ことに気づいた。

同教授はゼミでも講義でも、参加者全員によるメーリングリストを作り、毎回授業終了後に、振り返りとして感想を書き込むように参加者全員に促していた。皆は互いにコメント、感想を述べ、授業後の交流も行った。

メーリングリスト以外に、交流会等も行われていた。「本当に楽しかった。ゼミの後、よく食事会があった。ゼミ生が事前に何かを作って持ってくるか、あるいはレストランへ行って一緒に食事をする。課程修了生も参加するので、人間関係が良い。食事のときに、皆それぞれ自分の研究について話し合った」ので、a 氏はこのやり方に満足していた。

以上により、a 氏は早稲田大学、特に指導教官のゼミでの学習を通して、日本のゼミのやり方が優れており、「ゼミ生と先生は対等に交流する」形がいいと思っており、同教授の「国の文化

より、個人一人ひとりの文化が重要」という考え方に賛同しているようだ。

帰国後、a氏は自分の授業で改善を行い、学生に発表させ、自由討論のチャンスを与えるようになった。「今まで取り入れなかった授業の形を試し」ている。また、「個人一人ひとりの文化」の重要性を学生に伝え、学生は「視野が広がった」という。

全体的に言えば、a氏は早稲田大学での留学生生活を積極的に捉えている姿が窺える。論文は難航しているが、「学位より知識の獲得が重要」と考えているa氏にとって、早稲田大学で学んだことを授業改善で活用しており、非常に役立つ経験だったと言える。

2. インタビュー対象者b氏一日中の日本語教育におけるパラダイムの違い

b氏は、1986年に生まれの黒竜江省出身の独身女性である。2004年に四川省某大学の日本語学科に入学し、2008年に卒業した。卒業前に、四川省にある某大学で実習し、卒業後同大学の日本語教員として2008年から仕事を始めた。その後、辞職し、2009年北京の某大学院に入学し、日本語教育について勉強し始めた。2012年に学位の取得後、同年9月に日本文部科学省の奨学金をもらい、早稲田大学日本語教育研究科の研究生となった（2012年9月から2014年3月）。文部科学省の規則では、研究生は1年半以内に正規課程に進学できない場合、奨学金の支給対象外となる。結局、b氏は2回試験に落ち、やむを得ず2014年3月に帰国した。そして、生活のため、北京にある全国でも有名な民間外国語学校に就職した。ただ、試験に落ちたことに満足できず、日本語教員として働きながら、再試験を準備している。

早稲田大学での留学について、b氏は日本語教育において、中国と日本は「パラダイム」が違っていると考えている。指導教授はb氏に対して、「中国人留学生は日本語教育研究科に入って、理念の新しさに引き付けられ、いろいろ研究テーマを変える。しかし、教育理念も研究方法も昔から脱していない」と言った。b氏は、「自分は日本側の理念に賛成し、別に理解できないところもなかった」と思っていたが、今からすれば「当時はやはり深く理解できなかった」と言う。

b氏がそれまで中国で受けた日本語教育の理念は、「学習者に言語知識を身につけさせる」ことに対し、早稲田大学の日本語教育研究科では「学生の全人的な発展」が狙いとなっている。日本側の理念を一生懸命に理解しようとしていたが、日中の教育理念の違いにより、b氏は、結局認められず、入学できなかった。だが、b氏は、早稲田大学の留学経験を日本語の授業で生かして、教育実践を展開していると言える。

以上、本章では、早稲田大学に留学したa氏、b氏のライフストーリーを検証し、彼女たちの留学経験が現在の中国での教員生活に如何なる影響があるのかについて分析した。日本と中国の日本語教育における環境や理念の相違により、2人とも苦勞しているところが見られる。ただし、結果からすれば、2人とも早稲田大学の留学経験をプラス的に捉えており、現在の授業運営に活用していると言える。

(蔣 偉)

第5章 留学経験と中国人女性教師のキャリア発展

本章では、早稲田大学での留学経験を持つ中国人女性の日本語教師(c氏、d氏)を事例として取り上げ、早稲田大学での留学経験が彼女たちのキャリア発展に如何なる影響を与えたのかに

ついて、検証したい。

1. インタビュー対象者について

インタビュー対象者c氏とd氏は共に早稲田大学日本語教育研究科で修士学位を獲得している。c氏は1982年陝西省生まれである。2010年9月から2012年8月の間、日研の修士課程に在学していた。2006年7月に中国内陸蘭州市某大学の日本語学科を卒業し、同年9月より同大学日本語学科の助手として4年間勤めていた。海外出願を通して2010年9月に日研に入学した。

日研卒業後、帰国し、2013年9月より、寧夏回族自治区の銀川にある某大学の日本語学科で日本語教師として就職した。c氏は2012年12月に結婚したが、夫は蘭州市の病院に勤務し、2013年12月に長男が誕生した。

d氏は1983年に陝西省西安市生まれである。2009年4月から2011年8月にかけて日研の修士課程に在籍していた。留学前は、故郷西安市の政府部門で公務員として働いていた。2004年9月に仕事を辞めて来日した。専門学校を経て2005年4月に東京某大学国際関係学部・日本語教員養成コースに進学し、2009年4月に日研に入学した。在学中、長女が誕生した。2010年4月に大学院に復学し、2011年8月に卒業して帰国した。2012年9月に西安市にある某軍医大学の外国語教室で日本語教師として就職した。

2. 留学によるキャリアの変化

c氏とd氏を取り上げる理由は以下である。第1に、日本語教師として日本語教育に対する理解や認識をうかがうことができる。第2に、2人が留学する前に職業経験を持っているため、留学は彼女たちの職業選択やキャリア発展に如何なる影響を与えたのかについて考察することができる、以上である。

(1) 留学前の職業経験

2人は、来日前に職業経験を持っていた。その職業経験は彼女たちの留学動機に繋がる。

c氏は留学前に、出身校の某大学で日本語を4年間教えていた。同大学は中国のエリート大学で、教育条件が沿海部とくらべると立ち後れた内陸部においては有数の名門大学である。同大学での職業経験に関して、「私は学歴が最も低くて、年も一番下。さらにこの大学の出身だから、周りの人に相手にされない気がした」と述べていた。同大学で経験した挫折感は、c氏に自己否定感をもたらした。

d氏は、もともと政府部門で公務員として働いていた。公務員は一般的な認識では、安定かつ社会的地位の高い仕事である。しかし、d氏は変化のない仕事に飽きたらず、仕事を辞め、日本に留学することになった。

2人は来日前、中国の社会では「良い」とされる仕事を持っていたが、職業に不満を持ち、留学を決意したのである。

(2) 留学動機

留学動機はc氏の教師としての信念に関わっている。c氏は大学教師の理想像については、単なる専門知識を教授するのみならず、自分の経験を学生に共有することによって、彼らに充実し

た人生を送らせるような仕事だと考えている。自分の社会経験がまだ不十分だと思っており、来日することに決めた。

そして、早稲田大学を選んだ理由については、c氏は中国における早稲田大学の知名度が高いという点を述べた。「せっかく日本に来るなら、地方より東京を見たい。早稲田は有名なので、留学するなら有名な大学に行きたい」と語っていた。

d氏は、来日後、日本語学校やI大学の日本語教員養成コースを経て、早稲田大学大学院に進学した。d氏は来日当初、日本語の学習歴も短かったため、大学入試の時に名門大学を目指していなかった。しかし、将来中国で日本語教師になろうと考えていたので、学部卒業後、専門度の高い大学院で勉強したいと思っており、日研に決めた。

知名度の他、海外出願制度は中国人留学生にとっては便利な制度である。c氏は、早稲田大学の日研の海外出願制度を利用し、書類審査だけで進学できた。近年、中国人の訪日ビザの手続きは昔に比べて簡単になったが、年収、残高証明書、不動産証明書などの制限はまだある。誰でも簡単に日本に来られるわけではない。したがって、海外出願制度は中国人留学生にとって有益な制度と言えるだろう。

(3) 早稲田での学び—修士論文での苦労

2人が在学中に最も困難を感じたのは、修士論文のテーマ探しであった。

c氏は、中国の大学で日本語を専攻していた。中国の日本語学科の学生は、暗記型・積み上げ型の学習方法に慣れているが、問題発見・解決型の学習スタイルにはなかなか馴染まない。

d氏は日本の大学を卒業したが、大学院に入学したばかりの頃、指導教授に与えられるテーマで修士論文を書くのではないかと思っていた。しかし、実際に論文のテーマは自分で考えなければならぬことが分かって、プレッシャーを感じていたという。

中国の大学院では、指導教授から研究テーマを指定する場合は少なくない。c氏とd氏は、日研に入学する前に同じような考え方を持っていたが、入学後その違いに適応できず苦労していた。しかし、半年の試行錯誤を通して自分の研究意識がだんだん明確になった。その他、ディスカッション型の授業スタイル、及び授業以外の自主的な勉強会や読書会などは、2人にとって早稲田大学での学びの特徴だと指摘していた。

(4) 帰国後中国の大学における仕事状況

2人は、卒業後、間もなく帰国した。1つの重要な理由は中国国内に家族がいることである。2011年に3・11関東大震災を経験したc氏は、災難に直面した際、身の回りに身内がない無力感を味わい、家族の大切さを痛感した。また、来日前にc氏には中国蘭州市の病院で医者をしている彼氏がいて、卒業直後、c氏は蘭州に戻り彼氏と結婚した。

d氏は、修士1年の時、妊娠して出産で半年休学した。長女の誕生後、子どもを中国の親に預けて再び早稲田大学で学籍に復帰した。卒業後故郷に帰った。

現在、中国の大学では教員を採用する場合、博士学位の取得が前提となっているため、修士学位だけでは、就職が困難である。c氏とd氏は博士学位を持っていないものの、大学で就職できたのは、やはり早稲田大学の知名度によると言えよう。

(5) 早稲田の留学経験を現在の仕事にどのように生かしているのか

早稲田大学での学びは、2人の現職にどのような影響を与えているのか、そして、どのように生かしているのか。

来日する前に蘭州の某大学で4年間仕事をしていたc氏は自分の能力が周りの同僚に認められず、挫折感を味わった。現在の職場である銀川の某大学について、c氏は「今は、周りに尊重されているように感じている。同僚や上司の評価が高い。達成感がある」と述べた。同大学の同僚や上司に自分の能力を認めてもらうことは、c氏にとって大いに意味を持つことである。早稲田大学での留学経験はc氏の日本語能力の向上に繋がり、そして中国で名前の知られている早稲田大学出身で修士学位を取得したといったこともc氏に自信をもたらした。

早稲田大学で体験したディスカッション型の授業はc氏とd氏にとって印象深かったが、そのような教育理念を中国の日本語の授業で導入する際に困難にぶつかった。大学では、各科目のシラバスがあり、1コマの授業で、何を教えるかはきちんと規定されている。しかし、じっくり討論を求めたディスカッション型の授業は時間が必要になる。そのゆえ、c氏は、折衷的な方法で実践している。「ディスカッション型の授業を全面的に実現させるのは、現段階では無理だけど、授業の一部として試していた。つまり、学生に考えさせるところでは、討論時間を設ける。それは、うまくいっている」と述べていた。

d氏は、修士論文では協同学習が中国の大学での実現可能性について研究した。協同学習にとって、重要なのはディスカッションを通して、参加者全員が新たな気づきを得るという点である。

3. 考察

本章は2人の中国人女性教師のライフストーリーを通して、早稲田大学での留学経験が彼女たちのキャリア発展に与えた影響について考察した。2人は、日本に留学前に中国社会では「良い」とされる仕事を持っていたが、現状に満足せずに、留学を決心した。早稲田大学は中国において社会知名度が高いので、彼女たちにとって将来のキャリア発展には有利と考え早稲田大学に留学した。しかし、2人は早稲田大学に求められた学問の主体性を欠いたため、修士論文のテーマ設定で困難に遭った。

とはいえ、早稲田大学での留学経験は帰国後の就職に役だったのみならず、彼女たちは職場の同僚にも認められ、自己肯定感を持つようになった。早稲田大学での学びが、彼女たちに自信を与え、自分の仕事に対する誇りをもたらしたことは注目に値しよう。(李 雪)

第6章 中国人女子留学生の経験—博士学位取得者

本章では、早稲田大学で博士学位を取得した中国人女子留学生e氏を対象に、早稲田大学における勉学・勤務がいかなる影響をもたらしたかについて考察していきたい。

1. インタビュー対象者—早稲田大学博士課程に留学するまで

(1) インタビュー対象者

e氏は2003年に早稲田大学の博士課程に入学した。在学中、助手、講師も経験しており、博士

学位取得後、帰国し、現在中国某省師範大学にて教鞭をとっている。

(2) 中国国内での学習歴

e氏は日本に留学前に、中国ですでに博士学位を取得していた。両親が教員だったe氏は中学校卒業後、極めて優秀な成績で地元の中等師範専科学校に合格した。本来、中等師範専科学校の卒業生は、小学校教員になる道に進む。しかし、e氏は在学中の成績がトップだったため、所在省の師範系大学へ唯一、推薦され入学した。

一方、中等専科学校出身のe氏にとって、大学での英語中心の外国語の授業についていくことが難しかった。e氏のように中等専科学校で英語教育を十分に受けていない学生用に、大学は英語以外の語学コースを開設していた。そのため、e氏は第一外国語が日本語、第二外国語が英語という形で大学在学中に日本語の勉強をした。そして、日本語の学習経験がきっかけとなり、「日本語を生かした研究がしたい」との思いから大学卒業後、日本研究で有名な研究室の大学院修士課程に進んだ。そこでの成績が優秀だったため、博士課程への飛び級が許可され、さらに在籍中に2年間の早稲田大学交換留学経験が認められ、無事に博士学位を取得した。

(3) 日本留学1回目

e氏は交換留学で早稲田大学に2年間在籍した。日本の「自由な状態」が一番印象深かったという。

中国の大学では、個人の時間割があらかじめすべて決められているので、個人でマネジメントする必要がない。また、ほとんどの学生がキャンパス内の寮で暮らしているため、大学生の多くは晩御飯の後クラスメート同士で交流したり、夏にはスイカパーティをやったり教授と卓球をやったりしていた。ところが、日本に来たらだれも「干渉」してこない。後に新聞社に務める知り合いに依頼され、そのような日本での経験を日本留学経験記として中国の紙面で発表したこともあった。「大学生は自分で自分の時間管理をできるようにしなければならない」というのが、当時の印象だった。

(4) 日本留学2回目—他校で修士課程に進学し、学位取得

早稲田大学での交換留学終了後、e氏は中国に戻り、博士学位を取得した。そして再び、2000年に私費留学生として、都内の有名私立大学の修士課程に進学した。

再び日本で修士課程に入学した理由について、e氏は次のように語っている。

「日本研究をしている以上、読み書きができる語学能力だけではなく、日本の学者と会話できるようになり、弁論の能力も含めて伸ばしたいと思っていた。当時の私の日本語能力は全く追いつかず、論述の能力、『答弁』と『応答』の能力は全然だめだった。日本の学者と『対話』できること、それが一番の目標だった」。

修士課程入学の理由として、年齢が若かったことと、中国で飛び級を実現したために博士学位は取得したものの修士学位を取得していなかったこともあった。

修士課程在学中、e氏はある会社の奨学金を獲得したため、経済的な問題はなかった。在学中、外国人留学生向けの日本語チューター制度も非常に助かった、と語った。

早稲田大学への1回目の交換留学の際には「海外からのお客さん」のような気分であったが、2回目の留学では「研究室の一員」に変わったと感じた。その一方で、研究の課題について自由

に発想することには、依然として抵抗を感じたという。e氏は当時を振り返って、「もっと先生に教わることがあったはず」と悔しさも感じている。

2. 早稲田大学の博士課程に学んで—仕事と研究と子育て—

2002年に日本で修士学位を取得したe氏は、翌年、早稲田大学の博士課程に進学し、入学直後に国費留学生資格を取得した。2年後実生活では第1子を出産し、学業と家庭の両立に励み、その後は助手、講師も務め、博士学位を取得した。

この間の生活について、e氏は精神的には大変だと感じなかったという。

「博士論文を執筆している時、もちろん毎日は夜2時・3時まで起きていた。アラームに起こされた毎日だった。しかし、自分は大変だと思っていなかった」。その理由について「指導教員のところでは、研究はもちろん、そのほかの多くの学術活動に参加できたことが大きな収穫だった。常に楽しむ気持ちで参加していた」。ちょうど指導教員のプロジェクトで若手研究者が必要となり、e氏は仕事を得ることになった。

論文と子育てを両立するうえで、e氏は自身と夫の両方の父母から子育ての支援を受けた。双方の親が交代で日本に来て、子どもの面倒を見てくれたという。それでも間隔が開いた時は、保育制度を利用した。e氏は日本の保育制度を高く評価し、「出生後43日が過ぎれば保育所に入れることができる。保育所は（子供への対応が）とても専門的なので、自分で（保育を）やるより良いと思う」と語る。実際、e氏は双方の親が来日している時でも、子供を保育所に入れていた。保育制度を上手に利用できれば、子育てにはとてもいい仕組みだ、とe氏は語っている。

そして、子育てのもう1つのメリットについて、「きりかえが早くなったこと」、とe氏は述べている。昼間は仕事、午後は研究、家に帰ったら子ども最優先で、論文だろうが仕事だろうが関係ない。子育て中は、精神的にとっても快適だった。研究のことで悩まないし、悩んでいる時間がない。e氏は子どもが研究に影響を与えるとは感じていない。ただ、時間的な影響はあることは否めない。1人産んだら他の人より研究が3年間遅れるというが、後の努力によって少しずつ追いつくことも可能、ということ、指導教官から教えてもらった。

いやなことは先にやり、残った時間を研究に使う。週末は家の近くにある図書館に通い、夕方には夫が子供を連れて迎えに来てくれていたという。中国の大学で一緒だった夫は、同じく早稲田大学で交換留学を経験し、e氏の2度目の留学にも付き添い、日本で修士学位を取得後、日本の企業に就職した。e氏の夫も、子どもの出世を望むと同様に、妻のキャリアも望んでいる、とe氏は語ったが、これは中国人の家庭観そのものである。つまり「男女問わずキャリアを積むことを支持し、逆に女性が主婦になることはどうかとってしまう」と。

3. 早稲田で学んだこと

(1) 帰国後の就職

早稲田大学で講師として働いた後、e氏は帰国して中国の大学に就職した。帰国後の就職活動も非常に順調だったという。着任した大学の関係者は、早稲田大学で勤務していた時期に仕事の関係で知り合った。帰国より前から大学関係者からスカウトされたが、当初は応じなかった。し

かし、3.11で子どもと夫が先に帰国したことがきっかけとなり、2012年に早稲田大学での任期が終了後、帰国して就職をした。

現在は毎週、学部1コマ、大学院1コマとゼミを担当している。

(2) 独立思考

二十年前 e 氏が中国の大学に在籍していた時と同様に、現在でも、中国の学生は自分自身で自らの課題を決めることに慣れていない。つまり、先生に尋ねて「何をしたらいいのか」、という受け身のやり方である。

e 氏が早稲田大学で学んだ一番の啓発は「独立思考」だ。しかし、e 氏が経験した日本のような学生の育て方を、中国にそのまま適応することは困難だという。

e 氏は、中国の子供は独立思考の能力がないわけではない。けれども、習慣的に独立思考を養う教育がなされておらず、そのため受け身の大学生が多いのではないかと考えている。そこで、e 氏は学生に「『自分の主体性』を持つように」といつも言っている。学部の授業は講義式だが、e 氏は質疑応答を取り入れるなどの工夫をしており、学部生もそれに積極的に応えている。

最も骨が折れるのは、修士学生がテーマ探しをするときだ。e 氏が日本に留学した際、指導教官から「研究をやる主体は本人だ」と諭され、自分でいろいろ試行錯誤してやった。その経験は、中国国内の事情と大きく異なり、戸惑うことも多い。

中国では、指導教官がテーマを与えるやり方が今なお主流で、さらに科学研究プロジェクト制度が盛んなため、研究プロジェクトを多く持っている先生は自らのプロジェクトを学生に分担させる。学生は、そのようにテーマが与えられるやり方を受け入れているという。

しかし、e 氏は現状を危惧し「私は学生本人の学術に対する『根源的な』興味が必要であると考えており、これは早稲田での留学から影響を受けた」と述べている。e 氏は、大学院のゼミで修士学生を指導する時、学生に「何がやりたいのか、何が好きなのか」を絶えず問い続けているのである。

(孫 佳茹)

まとめ

本研究の目的は、早稲田大学出身の女性教員（1940年代から80年代生まれ）のライフストーリーに基づきながら、早稲田大学が1960年代からの約半世紀の間に、女性教員の職能形成において、どのような役割を果たしてきたのかを、明らかにすることである。換言すれば本論文では、戦後日本における開放制教員免許制度の下で女性教員としての職能形成に早稲田大学が果たした役割を検証してきた。

また早稲田大学は、戦前、戦後を通じて中国、韓国といったアジアの留学生を積極的に受け入れ、早稲田出身の卒業生が帰国後、教育界に入ることによって、それぞれの国での早稲田大学の名望を高めてきた歴史的経緯がある。そのため、本研究では、早稲田大学卒業の中国人女子留学生が、早稲田大学で学んだことをどのように生かしているのか、早稲田大学での学びがその後のキャリア形成にどのように役になっているのか追跡調査を行ってきた。

日本人の女性教員に共通して言えることとして、早稲田大学の学びとしては、メリットとしては自由な雰囲気指摘しながらも、マンモス授業から来る物足りなさを指摘し、大学の講義で学

んだことはあまり役に立っていない、特に、レジュメの書き方や発表の仕方、あるいは教師になった後に必要とされる技術的な知識の習得機会が少なかった、と一定の不満を述べていた。

ただし、早稲田大学に入学する学生は、資質が高いことから、彼女たちは、自分で動き、チャンスを得て、自己成長を遂げている。また、4年間の大学生活を楽しかった肯定的に捉え、特に、サークル活動、ボランティア活動の繋がりが学生生活の充実に結びついたと語っている教員が多い。つまり、大学での「学び」の内容で大きな比重を占めているのは、サークルなども含む幅広い人間関係で得た経験なのだと考えられる。

こうした繋がりは卒業後の現在まで続いていて、その仲間付き合いが生活上の楽しみのひとつとなっている。またサークルだけでなく、各地の稲門会の集まりやホームカミングデーなど、卒業生が大学と関わる機会も多い。この強い組織力が、卒業生を大学の活動に関わらせるきっかけとなり、そこで昔話を皆で語り合ったり活動したりすることが、在学中の思い出を肯定的に捉え返すこと、現在の仲間同士の結びつきを強化することに繋がっていた。そして、こうした現在の卒業生のネットワークが彼女たちの生活全体を豊かにしており、それが結果的に、仕事を含む自身の人生全体を前向きに捉えることにも結びついていると考えられる。以上が、大学における土台としての「学び」と職業における職能形成との関わりの意味するところである。

出会いと学びのチャンスを与える上で、早稲田大学は特筆すべきものがあり、こうした機会を利用しながら、早稲田大学出身の女性教員は、人間的に成長しているという特徴を指摘できる。教師としての技術としては、教員になった当初においては、教員養成系に劣るかもしれない。しかしながら、経験値が高く、広い知識、人間力を持ち、「のびしろ」があるというのが、早稲田大学の女性教員に共通していると言えるのではないか。

大学生活は、数多くの人々との出会いの場であったと同時に、知識や人脈を生かして自らの目標のために行動する実践力を培った期間であった。そしてその実践力が、現在の学校現場でも活かされており、生徒や職場の教師を巻き込む力にもつながっている。そして、そうした人間力からくる、生徒に向かう情熱も、また早稲田の女性教員の持つエートスとして、指摘しておきたい。

このように、早稲田大学の「学び」においては、在学者の自主性や自助努力に委ねられている側面は少なくないと推察される。大学に潜在している学びの可能性やそれに付随するネットワークを活用するサポートをいかにしていくかが今後の課題であろう。

一方、中国人留学生については、早稲田大学で先端的な日本語教育を学び、彼女たちは中国の教育現場でその理念を生かして授業を試みようとしている。しかし、これらの理念は現場の制限により、うまく生かせない場合や、中国の大学の制度上などの問題によって実現できていない部分がある。ただし、彼女たちは、こうした問題に直面しながら、早稲田大学の理念を中国の教育現場の状況に合わせて、教育実践を行っている。

また、早稲田大学が中国では、高く評価されているということもあり、早稲田大学での学びは、彼女たちのその後のキャリア形成にも影響を与えている。そして、早稲田大学で学んだことを、誇りとして感じる留学生たちの姿に、大学卒業後も継続的な彼女たちの支援とともに、早稲田大学の関係者として、一層に精進することの必要性を感じる次第である。 (小林(新保) 敦子)

[追記] 本論文は、早稲田大学教育総合研究所の公募研究（2014年度、2015年度）「早稲田大学出身女性教員の戦後史—ライフストーリーの分析を通じて—」のまとめである。早稲田大学教育総合研究所の関係者の皆様に、心からの謝意を表明したい。

注

- ①小池俊夫（2010）「開放制教員養成の哲学と現実」、『學苑』（835）、昭和女子大学、1-10頁、②岩田康之（2013）「教員養成改革の日本的構造：『開放制』原則下の質的向上策を考える（教師教育改革）」、『教育學研究』（80）4、日本教育学会、414-426頁、参照。
- 早稲田大学企画室調査課編『早稲田大学統計要覧 昭和60年度版』、早稲田大学企画室調査課、1985年、1頁「学生・生徒数」をもとに算出。
- 早稲田大学ウェブサイト、学生に関する情報「2015年度学生・生徒数」（<http://www.waseda.jp/top/about/disclosure/students>、2015年11月26日閲覧）をもとに算出。
- ①稲垣忠彦、松平信久、寺崎昌男『教師のライフコース—昭和史を教師として生きて』、東京大学出版会、1988年、②藤原顕・遠藤瑛子・松崎正治『国語科教師の実践的知識へのライフヒストリー・アプローチ—遠藤瑛子の事例研究』、溪水社、2006年、③山崎準二『教師の発達と力量形成—続・教師のライフコース研究』、創風社、2012年。その他、塚田守『女性教師たちのライフヒストリー』（椋山女学園大学研究叢書）、青山社、2002年、なども参考にした。
- 独立行政法人日本学生支援機構ウェブサイト、平成25年度外国人留学生在籍状況調査 http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data13.html、2015年1月18日閲覧。
- 早稲田大学留学センターウェブサイト、留学生に関する統計データ、<http://www.cie-waseda.jp/jp/about/statistics/#a02>、2015年8月31日閲覧。
- 早稲田大学大学院日本語教育研究科ウェブサイト、<http://www.waseda.jp/gsjal/features.html>、2015年8月8日閲覧。

[付表] カテゴリー名と主なアイデアの一覧

大カテゴリー	小カテゴリー	主なアイデアの中身
1 早稲田大学	授業 サークル 教育実習 大学生活 大学4年次の就職状況 教職についての印象 大学院 卒業後の関わり 学部のフォロー 大学受験	<ul style="list-style-type: none"> ・学部の授業は役に立っていない、土台にあるのは4年間の講義、レジュメの書き方一つ学んだ記憶がない、発表する授業がなかった ・サークル活動の仲間のつながり、専門外で視野が広がった、 ・同窓会みたいな教育実習、実習でやる気になった、新米=素人、自由な授業づくり、実習と現実とのギャップ ・バブル期で金融や証券がかっこいい、あえて教員という選択肢がない、他の仕事に向いているのか分からない、教育学部なら公務員か教員 ・特に教員になりたくなかった、落ちて教員、アナウンサーの夢 ・筑波で教員になる覚悟が来まる、早大と筑波大のいいところ、レジュメの書き方・発表の仕方の基礎、ほぼ皆が教員志望という環境 ・サークルの繋がり、専修では一度も会っていない、稲門会、ホームカミングデー ・早稲田教職の口利き、最後の最後にお世話になった、講師の斡旋 ・とにかく早稲田に入りたい
2 職業観	女性としての立場 人間相手の職業 仕事に対する想い 理想の教師との出会い	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭との両立の苦勞、女性でフルタイムはめずらしい、女性が不利あまりない ・やりがい、チャンスは二度とない、失敗すると大変、人間相手の面白さ ・石にかじりついてでも仕事は続けたい、つくづく人脈、好きじゃなきゃやってらんない ・小学校の担任(生徒と一緒にになって取り組む人)、この校長のもとで働こう、高2の世界史の先生(授業が面白く、何かと世話をしてくれた)
3 教員としての経歴	採用試験 就職3年以内 赴任先 退職後 その他の活動	<ul style="list-style-type: none"> ・定時制の3年間で鍛えられた、若い普通科教員は汚れ役をやらない、初めてで慣れないことだらけ、科目数の多さ ・工業高校、神奈川、住居は世田谷、現地の寮に3年、神奈川、成瀬で10年 ・退職後の再任用 ・教科書の編集委員、全国歴史教育研究協議会事務局
4 生徒への想い	生徒との関係 課外活動での関係 授業での関係 生徒の多様さ 生徒の親 高校生の団結力 高校生の大人 高校生の子どもらしさ 元教え子	<ul style="list-style-type: none"> ・ぶつかり合い、生徒と接して楽しかった、一言が人生を変える、せめて学校で安らいでほしい、生徒との関わりで悲しい思い ・先生の出身校に興味をもつ受験生、もっとゆっくり時間をとってあげたかった、文化祭・体育祭、進路指導、普段話していない子はふとした会話の機会を逃せない ・教科が信頼に影響、どんどんやるしかない、体当たり、やる気が生徒に伝わる ・就職が続かない子、少年院のお世話になる子、受け取り方の違い、進学校と工業校驚くほど違わない ・子どもより親が大変、家庭環境が学力と関係する ・ものすごいものを作り上げる、エネルギー ・生徒を畏れよ、中学から高校へ成長に驚き、生徒はよく見ている、帳尻合わせる ・素材でストレート、いい子、かわいい、まっすぐにぶつかってきてくれる ・年賀状でのやりとり、教え子が早稲田へ入学
5 授業	自分の専門 専門性 教材研究 授業の重要度	<ul style="list-style-type: none"> ・国語、現社・世界史・地理、国語の教材は幅広い、世界史を学ぶ意味 ・大学時代に学んだことが直接生かせる、準備をしても相手で変わる ・教材研究に追われる毎日、準備不足の授業は伝わる、自分の学力で苦勞 ・授業はつぶせない
6 子育て	職場の理解 夫の職業の影響 子どもとの関係 両親の支え	<ul style="list-style-type: none"> ・職場の子育てへの理解のなさ、学校が協力してくれた ・夫婦とも教員だと融通がきく、共稼ぎ、保育園の送り迎え夫婦で協力 ・日曜くらいは子どもといたい、保育園の送り迎えがざりざり、子育ては計画通りにいかない、土日の部活練習に子どもを連れて行く ・自分と夫の両親の支え、全面的なバックアップ、親がいなきゃとっくに辞めてた
7 職場環境	研修 制度について 事務の多忙さ	<ul style="list-style-type: none"> ・研修が多い、役に立たない研修、昔はきたら一人前扱い、人員不足 ・管理職の膨大な仕事量、書類は全部自分で入力、昔はのんびり、生徒との時間減 ・流動的、コロコロ変わる入試制度、再任用は1年で転任、制度の改善による恩恵
8 その他		<ul style="list-style-type: none"> ・体は丈夫、どうしても教師になりたい人は臨時採用を繰り返す

